発行所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸ノ内ビルヂング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447
編集責任者　高須裕三
印刷所　関東図書株式会社
定価200円（年間購読料弐千円）
1977年3月25日　発行
第9巻　第3号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 9 No. 3

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

スウェーデン新首相トルビョルン・フェルディンの横顔

Presenting Sweden's New Prime Minister

昨秋のスウェーデンでの総選挙の結果は、丁度西ドイツや日本の総選挙の前であったせいもあって、かなり話題となりました。本月報でもこの選挙については第8巻10号の高須常務理事その他の記事が掲載されたので御覧頂けたことと思いますが、最近のスウェーデンの英文雑誌SWEDEN NOWに、新首相フェルディン氏についての興味深い記事とインタビューが載ったので、その大要を御紹介します。筆者はルース・リンクという多年スウェーデンについて健筆をふるい、殆んど毎号SWEDEN NOW誌にその評論を寄せている著名な女流ジャーナリストです。（所長　西村　光夫）

44年間も続いた社会民主党政権を倒すという偉業をやってのけたトルビョルン・フェルディン（50）とは、どんな人物だろうか？又、今回の選挙の勝因は何であろうか？まずは、彼の生い立ちと人柄をいくつかのエピソードをまじえて紹介してみよう。

人　柄

フェルディンはスウェーデン北部の農民の出身である。幼少時代のエピソードとしては彼が非常に難産で生れたこと、3歳の頃「良きサマリア人」の話に感動し、家にあった聖書を取り出して近所の主婦に読んで聞かせたこと、8歳の時、先生に「お前は音痴だから口をつぐんでいろ」と云われて以来、今日まで二度と唱ったことがないことなどがある。学校は、父親が病気となり農場を手伝わなければならなかった為12歳で止めている。しかし、その後仕事のかたわら通信教育を続け17歳の時に中学卒業に相当する「学位」をもらっている。

フェルディンの両親は2人とも農民党（中央党の以前の名称）に属し熱心な活動家であった。フェルディン家の台所は政治のプランやの夢があらわれてはパイプや炉辺の煙のごとく消えていく会合の場所だったという。そのせいかトルビョルンは比較的早く地方政治の世界へ足をつっ込み、24歳の時から5年間、農民党青年部の彼の地方の支部長を務めている。この間フェルディンはソレフティオ（スウェーデン北部）近郊で行なわれた党大会を準備企画し、その際、F、A、ダールグレーン作の「ヴァルムランドの人々」という劇を監督し、自らも出演した。これがフェルディンの本格的な政治的デビューだったといえる―党幹部は「強建な体格と豊かな響きのよい声をもったこの舞台の上のハンサムな若者が、いつの日か政治的スターになることを見抜いた」というような話が伝わっている。

国会に選出されるまでの数年間フェルディンは地方議会のポストを務めているが、そこでは目立った貢績は何もあげていない。しかし1958年、32歳の最年少議員として国会に登場した時、事情は違っていた。故郷の近くの波止場の近代化を手始

目　次

新首相フェルディンの横顔……1
老人ホームから年金者ホテルへ
……小野寺百合子……6
スウェーデン派遣研究員のスウェーデン生活印象の一側面（続）……星宮　望……9
スウェーデンに関する最近の著書論文(二)
……小野寺　信
小野寺百合子……11

めに北部森林地帯の雇用問題、農学校の拡張、中小企業の援助、ノーランドの農業をもっと利益のあがるものとする為の援助など次々に国会に動議を提出している。その大部分がスウェーデン北部の援助を要求するものだったが、フェルディンの関心が終始「都市と農村の平等化」にあったことを考えてみれば当然であったといえよう。そしてこの「都市と農村の平等化」は同時に「非中央集権化」を意味しているのである。

1963年に「New Chamber」というテレビ番組があった。5つの政党から各々代表が出て様々な問題について見解を述べるといった内容だったが、中央党代表はフェルディンだった。ソレフティオ党大会がフェルディンにとって党内でのデビューだったとすれば、このテレビ番組は党の外へのデビューだったといえよう。

1964年の選挙で議席を失い一度は故郷の農場に帰る羽目になったものの、次の選挙で見事に返り咲き、1971年にはG、ヘドルンドの後継者として党首に選出されている。政治生活が多忙を極めてくると家に帰るのは週末だけになってきた。留守を守るのは妻ソルベイー彼女も農家の娘でフェルディンとは1956年に結婚している。2人の出会いはダンスだったという一と3人の子供、エバ（現在20歳）、ニクラス（17歳）、ポントウス（12歳）であったが、彼らの手間を省く為、農場の主業を穀物から羊へ変えた。当時、フェルディンの公のイメージは現実的でかなりのスローペース、始末におえないクシャクシャの髪を持ち、聖書に出てくるかと思われるような古めかしい言葉を使う人物といったものだった。このイメージを強化する為に中央党はまもなく選挙ポスターに羊を登場させた。

大体においてフェルディンという人物は才走ったことや記憶に残ることを云わないが、その言葉は素朴で実際的だ。彼が最も尊敬する人物はJ、F、ケネディとG、ヘドルンドだと私に語ったことがあるけれど、彼の言葉にはフェルディンはスウェーデンのハリー・ドルノマンであることがいつの日か判明するのではないか、と思わせるようなところがある。ひどく古めかしい感傷的なことを云ってもおかしくないし、窮地におちいっても全く他のスウェーデンの政治家では考えられないような方法でまんまと逃げおおせたりする人物だ。農民生活を送っていたくせにちっとも早起きでないとか、大変なコーヒー好きで時々流し込むようにサンドイッチを与えさえすれば際限なくコーヒーを飲んでいるとか、リラックスするのが上手でTV討論の前には、裸になってベッドにもぐりこみ1時間ほど睡眠をとり、冷水マサツをしてさわやかな気分になったところでゆっくりとパイプをつめる、などという話も彼の人柄をよく伝えているように思う。

フェルディンとマルクスや政治理論について論じようとしても意味が無いし、中央党のイデオロギーの源をどこかの経済学者や理論家の中に見つけようとしても無駄だ。フェルディンに云わせれば「中央党は資本主義でも社会主義でもない、それらに代わるものだ。」ということになる。

フェルディンのことを、安定している、イデオロギー的洞察をもった現実家、巧妙な策士家などと評する同僚もいる。フェルディンと最も親しいと云われ、かってはフェルディンと党首のポストを争ったことがある副書記長のヨハネス・マントソンは「オープンで信頼のできる人物、リーダーシップの才を持ち、人々の日常問題に非常に強い感覚を持っている。核問題に関しては確固たる立場を取るだろう。」と評している。又、フェルディンの私設秘書G・ローベリィは「一緒に仕事をしてきたこの6年間に彼がボスで自分達はアシスタントだというような感情を持ったことは一度もなかった。いわゆる名士ではないし、物静かな人だけれども不正に対してははっきりと腹を立てることができる人だ。」と云っている。最後にどの政治家に対しても痛烈な皮肉を浴びせる国会付の記者達のフェルディン評を紹介しておこう。「ヘドルンドはキツネのようにこうかつだったが（foxy）、フェルディンは親しみやすい（foiksy）。」「古めかしい万年筆を使って美しい飾り文字の署名をしたりする人物だ。」「話すことは粘っこく才気ばしったひらめきなどをみせることがけっしてない。文章は迷い犬のようにあちこちさ迷うが、それでも何を云ってるのかは解る。しかし、英語さえ話さない首相をスウェーデンが持ったとは驚きだ。」彼はどこででも短い間に眠るという特技を持っている。『ぐうたら者』と何度も云われながらここまでやってきたなんて、かなりのタフト・ガイに違いない。」

フェルディンがテレビのライトに汗を流しながら、王宮で国立に新内閣のメンバーを紹介してい

るのを見た時、誰もが間違いなく中国の店に置いてある雄牛を思い出したと思う。もっとも雄牛は強く断固として怒らせたら危険だが、さもなければのんびりと牧歌的なのだから、フェルディンにとって、それほど悪いシンボルとも思えないが。フェルディンは政府官庁に農場生活の感覚を持ち込んだし、パルメ時代よりも全てが非形式になるだろう。パルメはジーンズで歩き回ってもインテレクチュアルな紳士といった風がぬけなかったが、フェルディンは燕尾服を着ても相変わらずフェルディンである、フェルディンとはそういう人物である。

原子炉問題

今回の選挙でフェルディンの得票に大いにつながったと思われるのは核エネルギーの問題である。中央党が環境問題に特に力を入れ始めたのはかなり前だが、1970年代初頭に都会のストレスや汚染から逃れて土へ、自然へ帰ろうという運動が特に若者の間で起った。これは、やがて中央党と結びつき「The Green Wave（緑の波）」として知られるようになった。フェルディンが核エネルギー問題に興味をもつようになったキッカケは核エネルギーの放射性廃物を憂慮していた中央党の国会議員ビルギッタ・ハンブレウスがそれに関する質問をするのを聞いたことだ。フェルディンの興味に勇気づけられた彼女は、スウェーデンの原子物理学者で（現在はカリフォルニアで仕事をしているが）ノーベル賞に輝くハンネス・アルフベンを彼に紹介した。核エネルギーに非常に批判的であるアルフベンは協力を惜しまず、1973年の選挙前の中央党の記者会見にも列席した。緑の波運動は盛り上りを見せ、1973年の選挙では中央党は25%という党始まっていらいの得票率を記録したが、勝利はまたもや社民党の手におちた。

今回の選挙では核エネルギーの問題は実になく計算された時点で、しかも劇的な方法で持ち出された。これは成功を収めた。それにしても選挙キャンペーン中にフェルディンがこの問題に対して取った立場は凡庸な政治家の立場を越えたものだった。それはまさに荘厳で宗教的献身といってもいいと私は思う。国民は再三再三、フェルディンが私利私欲の政治を道徳の領域に高めるような発言を聞いたものだ。例えば「私は今後数千年にわたって子供や孫を危険にさらすような社会に貢献はできない。」「どんな政府の要職についてこの問題に関する私の信念をあやふやにするようなことはない。」「新しい原子炉をスタートさせるような政府には加わらない。」「政治の条件というものをよく心得えているが、この問題に関しては私の立場は無条件、絶対的なものだ。」「妥協したら自己嫌悪におちいるといったような問題があるものだが、これはそういった問題だ。私の今までの政治生活の中で最も重要な問題だといってもいい。」といった具合だ。

しかし、一方、連立政権のパートナーとなるべく自由党のパー・アールマルクは11の、保守党のイェスタ・ボーマンは13の原子炉を各々望んでおり、選挙キャンペーン中もこの件に関し譲歩の余地がないことを２人とも明らかにしていた。そして、政治は所詮政治であることが判明するにはそう長くはかからなかった。１週間にわたって秘密裡に審議された結果発表された政府声明は「新たな核原子炉バーシュベック２は計画通り積み込みが行なわれることとなり、現在建設中の原子炉に関しては、使用済みの核燃料の再処理について納得のいく合意に達するまで操業は開始しない」旨を国民に告げた。

フェルディンは遅かれ早かれ譲歩せざるを得ないだろうし、さもなければ政府を離れるしか道がないと予測していた者にとっても、転向がこんなにもすぐに、又露骨な形で現れたことは驚きだった。野党は「選挙民を欺いた。」と非難を浴びせている。フェルディンはこの政府声明によって「核社会への行進」をストップさせることができたと信じているようだが。

私は以下のインタビューをする為にフェルディンのオフィスにいた時、パルメの著書「政治とは意志を持つことである」を思い出した。フェルディンはこの本が気に入っていたと聞いている。パルメは首相の座にあった時政治とは地雷原を航海するようなものだと悟ったが、フェルディンも間違いなくこの事を認識するだろうと私は思う。

フェルディンとの対話

質　1980年までにスウェーデンはどうあってほしいか？　どんな変化が注目に値いするか？

答　1980年までに官僚制の大部分を取り除いて、決定権を中央機関から地方政府に移すことによって、個人が社会の決定に影響を与える可能性を増やしたいと思っている。同じような過程は経営部門ではすでに進みつつあるが、それは重

大な意味があると私は信じている。

経済の領域では、雇用という観点に立った場合、スウェーデンの大部分の田舎で重要な意味をもつ中小企業者も含めて国民が皆、未来には「約束（faith）」があると感じるようになるだろうと思っている。

質　中央党のイデオロギーはどんなものか？

答　我々の全ての活動の出発点はあらゆる人々の間の平等の概念だ。それには男女間の絶対の平等も含まれるし、職業に関係なく人を個人として尊重することも意味する。これがいつも私達の出発点だ。そして、人々が日常生活において、これを本当にそうだと感じることができる為には、本質的に中央集権化されていない社会が必要だ。生活にとって基本的に必要な雇用や住宅問題、社会の決定権に関し中央集権化されてない社会を作らなければならない。この基盤からさらに、よりよい環境を生み出すような社会を手に入れることができる。なぜなら権力の集中というのは解決するのが特に難しい環境問題を生み出すからだ。この非中央集権化哲学と難なく一致するのは社会市場経済(Social marketeconomy）だ。これは、経済活動の領域を制限するものは、弱者への配慮だという意味だ。さもなければ、法のジャングルが支配することになる。自由市場経済では、外部環境と労働環境の両方からその環境的理由によって制限を受けるし、一般に制限というものは社会的動機に基づいているものだ。しかし、残されたこの領域の中に競争の為の余地があるのだ。社民党の政府声明はこの非中央集権化の努力に関しては全く何も触れようとしなかった。社会党が導きつつあったのは、Meidner employee 基金や土地所有権の社会化の結果としての中央集権化された未来社会だ。

質　中央党と自由党とどちらが左寄りか？

答　経済政策に関しては、古典的なハカリにのせれば我々は自由党よりも右にいるが、今日ではほとんど差異がない。他の点に関しては例えば一般的な物の見方や哲学などは、自由党の主要路線は中央党のそれより左にあるといった方が正しいと思う。しかし、社会がある段階に達するには何が必要か、ということの捉え方を較べた場合、中央党の方がわずかばかり左にいるというべきだろう。

質　現在、スウェーデンの産業の４％が国有だが、これを妥当だと思うか。少なすぎる、あるいは多すぎると思うか？

答　パーセンテージをとやかくいうのはそれほど重要ではないと思うが、どうか？

私の基本的姿勢は、先に述べたように社会によって決定される市場経済を持つべきだということだ。そこではあらゆる部門において国有化の余地が残されているが、一つの部門全体が国有化される余地はない。

質　選挙キャンペーンの始まる前には、どんな社会を私達は望むものかという討論があった。いわゆる機械社会（gadget society）を続けていくのかどうか。核エネルギー社会がいやなら、代りにどんな社会が望ましいか、ということだったが。けれど、この討論はキャンペーン中には聞かれなかった。

答　消費における変化は長期にわたって行なわれるもので、新しい世界経済の秩序を支持すればスウェーデンではどんな結果が生じるのかを真剣に検討しない限り、変化について確かなことを云うのは非常に難しい。私は核エネルギーの存在しない社会が生産能力の低下につながるとは思わない。それは二つの理由による。一つには、莫大なエネルギー源のうち、現在使われているのはごくわずかだが、過去25年間、石油の値段が比較的下ってきていた為に、この開発に関してはほとんど何もなされてこなかった。しかし、今は、石油は値上りし、そのあおりで電気エネルギーも値上りしたから、今後は技術的進歩が期待できると思う。風を力学エネルギーに換える件にしても、私が２、３年前に考えていたよりもずっと実現可能に近づいているし、様々なタイプの収集機を使って太陽エネルギーを集めることだって期待した以上に速く進みそうだと信じている。恐らく太陽エネルギーを産業に利用するのは最初の段階では無理だと思うが、家庭など小さな単位では活用できるだろう。そうすれば現在使われている電気エネルギーを産業面に向けることができる。

質　政府声明が発表された後、こんなにも多くの人が「国民をだました」と非難の声を浴びせているが、どんな気持か？

答　勿論、今は難しい時だ。しかし、これは数日間、見込していたことでもある。簡単に云え

ば、私自身の内部でことを処理できなければ今後もやっていくことは決してできないだろう、という気持だ。最後に自分に尋ねなければならないのは、「100％自分の思い通りにいかなかったというだけで問題から全く身を引いてしまうというのは本当に正しいか？」という質問だが、私はこう考えた。私がこの問題から降りてしまったら、最初の2週間は人々はそれについて肯定的なことを言うだろう。しかし、次にこう思った—これが私の結論なのだが—3週間位したなら同じ人々が「フェルディンのしたことは本当に正しかったか？」と自問し始めるだろう。だから、私は、もしバーシュベック72について妥協せざるを得ないからといって、内閣・政府に加わることを拒否したら、エネルギー政策の方向を転換させることが最も大切だと考えている人々全部を欺くことになる。だから、それはできない、と決心したのだ。というのも他の全ての点に関しては政府声明は私と中央党が選挙前に云ったことと一致しているからだ。

質　「もう一つの原子炉を作るような政府には絶対に加わらない」といったようなあまりに断言的な意見を述べたことを後悔しているのではないか？

答　いや、その事についても後悔はしていない。なぜなら、その問題に関しては戦術的な線に沿っては考えなかったからだ。いや実際しなかった。それは絶対に正しかったと思ってる。自分の感情をそのまま表現するのが大切だと思ったからだ。

質　しかし、あなたは非常に経験を積んだ政治家だし、政治の中にもルールというものがあるが。

答　そうだ。だが選挙の前、私は16歳の時から政治の世界にいてゲームのルールも知っているが、これは次元の違う問題だと何度も云ってきた。勿論、私は厄介な状況におちいった。しかし、自分を試した時に私はこう思った。もし、今、議会でエネルギー政策の方向転換の努力に向けて過半数が得られるなら、支払わなければならない唯一の代価は loading を続けさせることだ。なぜなら、この審議が行なわれた時loadingは部分的にはすでに始まっていたのだし、安全な条件が一年以内に整わなければ確実にそれは中止しなければならないという但し書きもつけたからだ。さらに政府声明には、他に方法がない場合は三政党は国民投票によって問題を解決する用意があることも付け加えてある。

質　国民投票の有利な点、不利な点をどうみるか？

答　核エネルギーとその危険性に関して討論が行なわれてきた現在、スウェーデン人はこの問題に対し非常に高い知識を持っているに違いない。一つ難しいことは、どうやって国民に明確に問題を提示するかだ。しかし、政権を担当している三つの政党が、たとえ国民投票が助言的なもので決定的ではないと憲法上規定されているにしても、結果を無視することはできないと述べているのは明らかに有利な点だ。この特別な件に関しては国民投票は決定的なものとなるだろう。

質　貧しい国が貧困化の一途をたどるのにスウェーデンが豊かな社会への道を歩み続けることができるか？

答　これは豊かな国全てが直面している問題で、勿論、スウェーデンも含まれている。スウェーデンにとって唯一のわずかな慰めは、先進国の中で一番最初にＧＮＰの１％を海外援助にあてるという国連が設置した第一目標に達したことだ。これは今後の道のりの第一歩にすぎないということも云ってきた。しかし、現実的に考えた場合、いくらスウェーデンだけがＧＮＰの数％を援助にあてることを引き受けてみても豊かな人口稠密な国々が協力しないのでは我々の努力は大海の一滴にすぎない。実際、どうやってこの仕事にとりかかったらいいのか、つまり、第三世界の人々が購買力を獲得し、それによって生産の基礎を作ることができ、購買力がさらに増し世界貿易の仲間入りができ、といったプロセスをどうやって始めることができるかについて急進的な解決策を持つ者は今日、誰もいない。

大体において我々が住んでいる世界は邪悪な世界で、その一つのあらわれが我々が軍事防衛力を持たなければならないと信じている限り、それはこの世界では「must（そうしなければならない）」であるという事実だ。さらに我々は経済防衛も必要であり、あらゆる状況においてスウェーデンが確保しなければならない全ての産物に関してこの「must」が存在することになる。しかし、第三世界の生産物に特別な機会を与えるような道は、我々が真剣に討議しなければならない問題の中にあると私は信じている。

（要訳）　小山久美子

老人ホームから年金者ホテルへ

From Home for the Aged to Pensioner's Hotel

評議員　小野寺　百合子
Yuriko Onodera

わが国でスウェーデンの老人福祉を語るとき、常に老齢年金の高さとともに老人ホームの完備ぶりが話題となる。しかし一口に老人ホームといっても、戦後30年の間に、一般の社会福祉が驚異的な発展をとげたのにともない、老人ホームも面白いほどの変遷を経て1970年前後にもっともモダーンな完備した老人ホームとなったのである。しかしスウェーデンの福祉行政はこれらの老人ホームを最後として、その後は老人ホームなる収容形式施設の建設をやめた。「収容ケアより在宅ケア」という言葉は、スウェーデンでも大分前から云われていたが、この意味は、老人を老人ホームに収容する時期がなるべくおそくなるように、ホームヘルパーの強化により可能な限り長く老人を在宅のまま援助するというものであった。したがって老人が老弱のため日常生活に差支えがあればホームヘルパーを派遣し、それで間に合わなくなればはじめて老人ホームに収容するのが順序であった。ところがここに老人福祉の発想に変化が起ったのである。老人ホームといえば当然一つの集団ケアであるから規則があり、収容者の自由はある程度束縛され、また食事から掃除からすべてにケアが行届くから、収容者は一定の料金を支払えばホームに頼りきりとなり、独立心を失う。それは老人対策として好ましくないということになり、戦時中からすでに建設がはじまっていた「年金者ホーム」すなわち老人用集団アパートにサービスを充実させ、新らしく年金者ホテルとか住宅ホテルとか年金者サービスハウスとかの名称でよばれるものの登場となったのである。これは収容施設ではなく、あくまで老人のための住宅であるから、入居者はアパートごとにコムーン当局との間に賃貸契約を結ぶ。年金者ホテルの新しいものには、単身1室、夫婦2室の原則以上の室数をもつアパートもあり、特に身障者用に整備されたものもあり、家賃は相場なみで決して廉くはない。ただし国民年金だけの人の家賃は全額コムーン持ちであり、他収入の額によっては一部補助が出る。スウェーデンの国民年金では、住居費がなければ衣食は賄えるから、どんな経済状態の人でも年金者でさえあれば年金者ホテルに入居を申込む権利があり、生活は成り立つ。

年金者ホテルのサービスは、すべて入居者の自由選択によって有料で提供される。自分で食事を用意したい人は台所つきのアパートを選べばよいし、共同の食堂で食べることにしたい人はパントリーしかないアパートを選んで、食事は食券を買うことに決めればよい。また掃除や洗濯や買物などの援助を必要とする人は、ホームヘルパーをたのむことができる。その料金は利用者の収入次第で定まる時間給であることは普通の住宅と変りない。管理室の入居者リスト板に、ホームヘルパーを入れているアパートが一目瞭然とわかる標識がついている。食事を食堂でする人の場合など、一見新式の老人ホームと少しも変らないように見えるけれども、入居者の意識の上では、万事ホーム任せの生活と自由選択による自主的生活とでは大違いということになる。

年金者ホテルのもう一つの特徴は、老人ばかりを対象とする関係上、入居者の安全管理に細心の注意が払われていることである。各アパートと管理室の間には昼間は電話、夜はアラームが24時間作動している。そのほかに入居者の健在をチェックするシステムとして、昼間の時間トイレを使わないと管理室のリスト版にランプが灯る方式など持っているところもある。

こうして年金者ホテルは自由と安全をモットーに、老人のため最も理想的な住居であるとされている。ここを訪問すると、国民年金受給年齢以上であればよいわけだから、入居者の年齢が比較的若く、まだ何か社会的の仕事をしていそうな人の多いのに気がつく。その点老人ホームが全面ケアに依存する80歳以上の人々の集団であって、いかにも人生最後のステージを静かに過しているとし

か思われないのと大変に異る感じである。もう一つ年金者ホテルと老人ホームの大きな違いは、老人ホームの諸設備、すなわち食堂、リハビリテーション室、ホビー室、談話室、医務室などはすべて収容者の利用するところであるのに対して、年金者ホテルはだいたい1階と地下室が老人センターとなっていて、地域の老人に開放されている場合が多い。食堂は入居者の食堂と地域老人の給食食堂を兼ね、市価よりはるかに廉い食事が用意されている。談話室でコーヒーを飲みながら談笑している老人たちが、そこの住人か地域民か一々聞いて見なければわからない。センターの理髪室、美容室、足の手当室などの料金はいずれも市価に比べて廉く、リハビリテーション、ホビー作業、教養サークル、娯楽グループなどにも、入居者と地域民は同じように参加できる。

わたくしが年金者ホテルという耳慣れない名前を始めて聞いたのは、1970年に前年オープンしたマルメ市のエレスンズゴールデンを訪れたときで、ここは全国に先がけた画期的な総合施設で年金者ホテルと老人ホームとデイセンターが1ケ所に集まっていた。年金者ホテルはその後各地で計画的に建設がはじまった一方、老人ホームは現存のもの限りで新設はされないことになった。

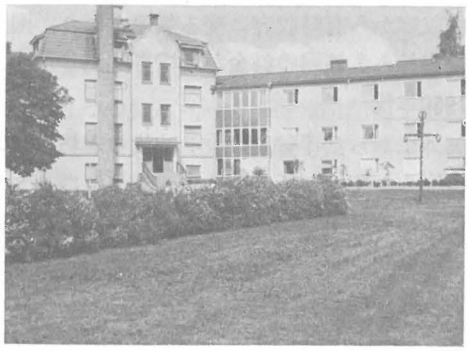
ストックホルムコムーンでは、1973年現在、老人ホーム10ケ所、年金者ホーム（アパート）2ケ所、年金者ホテル5ケ所、1973～77年建設中または建設計画のもの11ケ所であった。年金者ホテルは大ストックホルム中に散在し、街の中にもあれば郊外にもある。最も新しい町中の一つは、道路に囲まれた一廓を壊して建て直した一大ビルディングの半分が年金者ホテル、半分がオフィスビルと地下鉄駅になっている。

次に一つ目新しい年金者ホテルがある。それはストックホルム市と橋を一つ隔てたリーディングエーコムーンのヘーグセトラである。これはリーディングエー病院の隣に建ったばかりの三棟の年金者ホテルであるが、ここの特徴は同じ敷地内に義務教育9年の基礎学校があり（高等学校も建設予定）、図書室と作業室が老人と学校の共通になっていること、また時間をきめて一般の地域住民に開放していることである。年金者ホテルと棟つづきに幼児学校（保育所のうち学齢前の1年間）や保育所がある。附属のショッピングセンターやカルチュアセンターやキアフェテリアなどの利用も一般住民といっしょである。こうして老人の孤立化を避け、あらゆる年齢層を含むコミュニティーの中に老人を包み込む工夫がありありと見られ

最新式の年金者ホテルとデイセンター
（Norrköping）

ヘーグセトラ・年金者ホテルと子供たち

ヘーグセトラ（Lidingö）



典型的な老人ホーム（Åmål）

る。ここで青年たちとビリヤードに興じていた老人の姿が印象的であった。こうした配慮が老人たちの希望とマッチしない筈はない。現在この年金者ホテルの待機リストは2.000人という話である。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ここでスウェーデンの老人ホームが、戦後30年の間に歩んだ経過をふりかえって見ることは、わが国の老人福祉に何らかの示唆を与えるかもしれないと思われるので、年代順にざっと述べてみたい。

1940年代

中世の「貧民の家」が前世紀末に老人ホームと名を改めたが、内容は旧態のままで「貧は罪なり」の観念から、老人ホーム収容者の取扱いは強制労働や自由束縛など懲戒的性格のものであった。1940年代はまだその名残で、老人ホームといえば都市の外にあり、大部屋にユニホームを着せられた老人が起居していた。

1950年代

新しい老人ホームの基準ができて、それに従って老人ホームの改造が順次に着手された。すなわち大部屋を仕切って単身者1室、夫婦2室の個室につくりかえ、各フロアに外線につながる電話や談話室やコーヒーぐらい沸せるコーナーなどを新設し、ホビー室を設けて希望者には軽い作業をさせることにした。それでも「老人ホームは恐ろしいところ」というイメージは根強く、当局は「強制労働の代りに自発的な楽しい仕事」など宣伝文句を使って、老人ホームのイメージチェンジをはかったほどである。この時代は救貧法による運営であったから無料収容であった。

1956年に救貧法が公的扶助法に代ってから老人ホームもだんだん変っていった。その頃になると国民年金が食べられる年金となり、老人ホームも無料収容から有料収容に変る気運となり、国民年金で支払える範囲の料金が考慮され出した。

1960年代

郊外にあった「貧民の家」時代の老朽ホームを漸次廃止していって、町の中、とくにニュータウンなどはその中心地に、新しく質のよい老人ホーム建設が行われ出した。ベッド数は差引して毎年少しづつは増加していった。新老人ホームの良さが国民の間に浸透しはじめると老人絶対数の増加と相まって、ホーム入り希望者が急増し、ベッド不足が目立ちだした。しかし当局は老人ホーム増強には力を入れず、ホームヘルパーの増員と年金者住宅の質と量の強化に努力し、「収容ケアより在宅ケア」をモットーにすることにした。

老人ホームの料金は、各コムーンが独自に決めるものだが、多くのコムーンで、国民年金から100クローナあまりの小遣い銭を残す制度をとっていた。この金額はホーム運営費の半分に当り、あとの半分はコムーンの負担で公的扶助法が適用され、したがってこの頃でも老人ホームは低所得層を対象とするものであった。先に述べたマルメ市の総合施設の老人ホームでも一律料金制を採用していた。

1970年代

70年代に入る前後から、公営老人ホームのうちの新しいもので、入居者の収入に応じた料金システムを採用しはじめた。それは最低料金は国民年金から割り出すが、その他の収入のある人は収入全部をコムーン当局に渡してしまう方式で、当局は計算して最高料金をそのホームの運営費相当の額までに決める。こうなって始めて低所得層でなくても老人ホームにはいれる道が開けたのである。それまで中間層の老人には老人ホームは閉ざされたもので、この人たちの不安は大きかった。スウェーデンに僅かばかりある私立老人ホームは、料金や権利金が非常に高く、余程の財産家が財産を処分するのでなければはいることはできないのが多い。

また別の料金システムをとる老人ホームもできた。それは国民年金の70%、付加年金その他の収入すべての80%を料金として徴収するもので、これが今では一番普及しているように思われる。

以上の通り、僅か30年の間に、「貧民の家」から出発した老人ホームが、行きつくところまで行き、そこで老人福祉の理念の変更があったのだから、老人ホームとしてこの上の発展はもうないものと思われる。

寄　稿

スウェーデン派遣研究員のスウェーデン生活印象の一側面（続）

Vol, 9 No, 1につづく……

東北大学工学部　星　宮　　望
Dr. Nozomu Hoshimiya

「スウェーデンの教育」

よくスウェーデン人は、私には滑稽に思えるほど、自分の国の自慢をしますが、大学についてもレベルが世界一であると思っているようです。学部の教育レベルは、かなり高いと言うことが出来ると思います。これは教官の義務と熱意が教育面に非常な重みをもっていることと、政策として教育用の予算が大きいことのためと思われます。ウプサラ大学の電子工学科の場合、クリーンルームでの半導体素子製作の基礎実験、高周波スパッタを利用した実験、ＴＴＬ―ＩＣを用いたコンピュータとテレタイプなどとのインターフェースの実験、ロックインアンプを用いた微小信号検出の実験などが学部の学生実験で行なわれており、グラフィックターミナル数台をそなえた小型コンピュータシステムが学部学生にも四六時中開放され、好きな時に自由に使える（オープンシステムで言語はベーシック）などの優れた教育設備とプログラムを持っていました。日本の場合には、教育面が高レベルであれば、研究面はこれより数段優れたもの（設備、研究内容とも）を持っているのが常識かと思いますが、スウェーデンではこれが逆になっているようです。研究については、全国レベル（大学が６つしかない）での重点主義をとっているらしく、重点的に研究をする所を除くと学生実験用の設備以上の研究設備は、あまりないようです。また大院学生の研究や、教官の研究活動はそれほど活発でないように見うけられました。大学院生の場合には、そもそも大学院生の志望者が少ないことがあげられます。何人かの友人に聞いたのですが、高卒と大学卒と大学院卒の給料がほぼ同じというだけでなく、累進課税のため、技官も助手も教授も税引後の給料にはあまり大きな差がない〔私のいた研究室の、国から直接雇われている特殊技能の技官は、自分の給料の方が自分より年長の教授の給料より上だと言っておりました〕。ですから、何も無理をして大学院に入って勉強することもないわけです。例外的に熱心な学究肌の者が大学院に入りますが½助手をやって給料をもらっておれば、学費もかかりませんし、女性の友人とアパート代を折半すれば生活費は心配ありません。従ってあわてて５年で博士号をとる必要もないわけです。大学院に入って10年目の友人がおりましたがあと１～２年でそろそろ論文をまとめようかと言っておりました。

学部のコースは技術系ではほぼ必修に近い出来合いのコースをとることになりますが、その他のコースでは自然科学、人文科学を合せて規定以上の単位をとれば学士相当の資格がもらえるようで自由度は大きいようです。

スウェーデンの教育での特徴的なものに成人教育があると思います。県に対応するコンミューンの教育費は予算中最高の割合（50%近く）を占めています。多分、成人の２～３人に１人以上は何らかのコースを選択しているようです。コースには語学、医学基礎、写真、織物、せともの、ダンス、美術、音楽…etcと多種類にわたっています。

例えば、ウプサラのKursverk-samhetenでの英語コースには力量による11レベル＋移民用の３レベル＋３つの特殊コースが各種時間割で組合され、計80コースあります。比較的安い金額（半年で１万円前後）で自分のレベルアップをはかることが出来、広く奨励されていました。ＴＶ番組は、一日数時間、２局のみでＮＨＫ教育テレビに近いものをやる位ですから、夜自宅でブラブラしているより成人教育を受けることが自然なようです。

「子供のしつけ」

日本でも最近、子供をしからない親が多くなって、「しつけ」のあり方が論議されているようですが、スウェーデンの場合は、日本の現状を10年位先取りしているようにも思います。通常の家庭では目立った日本式のしつけはないようです。体罰を加える風景は一年間で二回ほど見かけただけですし、あまりしないようです。むしろ体罰を加えることが多いと近所から連絡が入り、子供に代って両親に抗議する組織の人が子供の代弁をしてやめるよう話をするとのことです。このような風潮はもちろん学校ではもっと徹底していて、小学生が学校でタバコをすうことはめずらしくなく、先生は余計なことは言いません。たまに麻薬を学校ですっている時には、親に連絡が行くとのことです。アルコール類は大人に対しても制限があって、酒の専売所（人口13万人のウプサラに４ケ所）でないと買えませんが、冷蔵庫からカンビールを持ち出したりして時々子供が飲んでいるのを見かけました。このようなほとんど完全な放任主義とも思える子供の扱い方の中にあって、やはり日本とはちがった形のしつけが行われているようです。まず生れてすぐの冬から-10～-15℃の屋外に乳母車に寝かせて出し寒さに耐える訓練をするようです。慣れてくると１～２時間出したままのこともあるようです。（ただし皆がやっているわけではありません）。また両親がパーティーに行くときはもちろん、平常でも夜７時～８時には子供部屋に行かされます。バス、デパートなどでダダをこねている子供はめったに見られません。成長すると子供も一人前に扱われ、例えば夏期旅行のプランの決定を一人一票で投票して決定するようなことも行われるようです。このときの少数意見は次回に優先して扱うなど、家庭生活そのものを通して民主主義の原則が自然に身についていくようです。

「男女同権」

ウーマンリブという新しい言葉があるようですが、たまたま国際婦人年の年に滞在したこともあり、少し観察してみました。私の目からみると行き過ぎではないかと思うくらい男女同権が徹底しているように思われましたが、新聞などによるとこれでもまだだめだとの運動があるようです。この一方で男性復権の運動もあるそうです。日本的センスではスウェーデンの男性はあまり迫力がない気がすることもあります。この国は人口が少なく、労働人口が不足しているため女性が仕事をすることは不可欠ですし、税金と物価が高いため男一人の給料では生活は相当きびしくなります。前述のようなこの国の気候・生活環境で女性が仕事をしないで自宅にいることは、かえって問題を起すことになりかねないように思います。私共の北極岬旅行の５日間のバスツアの運転手が女性でガイドが男性でした。運転手の女性はスウェーデン語しか話せませんでしたが、ガイドは英・独・仏・スウェーデン語の４ケ国語でガイドしていましたから当然のことと思われます。家庭での夫婦では、家事も50％づつやるのが普通で、例えば食事の支度を一日おきに交代するとか、育児と洗濯を交代でやるとかのとりきめが厳守されているようです。大学でも４時45分（夏）になるとほとんどの人が仕事に関係なく、教授と討論の最中でも即刻帰ります。よく聞いてみると、奥さん（？）が帰宅するのより５分遅れると、次の時に奥さん（？）が５分遅れるのを認めなければならないとのことです。同じ思想に従って、人によっては夫の浮気と妻の浮気がキャンセルすることもあるようです。話が出たついでですので蛇足ながら付言しますと、私達の住んでいた大学関係の財団のアパートは家族用でしたが若い人々のほとんどは日本流に言えば同棲ですが、上記の男女同権を考えるとアパート代が$\frac{1}{2}$になるだけ得なのだそうです。入口のドアに二人別々の姓がダイモテープで貼ってありますのですぐ我々にも区別がつきました。また未婚の母親は現実にかなり多いし、私共のスウェーデン語の教科書にも出ておりました。もちろん税率表にも出てまして、夫婦そろって子供のいる場合より税金が安くなっております。従って子供の養育補助は両親に与えられるのではなく、母親に与えられる仕組になっています。

★　★　★

社会福祉・ポルノなどの日本とはきわだって異なった事柄も気候・風土やその国の歴史などと極めて強い相関があると感じております。

ごみ・広告・騒音のないクリーンな街と美しい自然。そこで自分の足もとを見つめて、のんびりと生活する人々の姿。没交渉の孤独で暗い冬と、

若い女性がビキニ姿で街を闊歩し、いつまでも暗くならないすばらしい夏。これらを思いうかべても3～4ケ月前までの事柄というより夢の中のような気がしております。
以上、14ケ月間のスウェーデン滞在中の、びっくりした事柄を中心に、主だった印象を断片的に綴りました。

御多忙の間、もしこの文を終りまでお読み下さった方がおられましたら、厚く御礼申し上げます。

Hej då! （ヘイドウ、さようなら）

〔1976, 10. 16〕

スウェーデンに関する最近の著書論文（昭和51年）(二)

Papers on Sweden

小野寺　信

○スウェーデンにおける保健医療構造の抜本的改革案　――「改革者」1976. 4月号

○社会福祉と防衛との関連（上・下）――「改革者」1976. 8～9月号

○スウェーデンにおける社会民主主義的防衛意識の発展　――「外務省調査月報」XVII 2号

○バルバロッサ作戦および関連諸作戦計画作業の進展とスウェーデン――「外務省調査月報」XVII 2号

小野寺　百合子

○スウェーデンの健康保険制度
民主社会主義研究会議
――「改革者」2月号　No. 191

○スウェーデン国王
――「児童問題講座」I 児童政策　第2節
ミネールヴァ書房

○ペレのあたらしいふく
――Elsa Beskow 翻訳　福音館

○スウェーデンの医療保障　社会保険研究所
――「社会保険旬報」11月号　No. 1196

○スウェーデンの老人施設　厚生科学研究
――「老人ホームの地域開放」のうち

○医療と福祉の綜合的サービス体系のあり方について
―スウェーデンにおける長期医療のクローズドケアとオープンケア―
――社会老年学　No. 4
東京都老人総合研究所

事務局より

(1) **ルンドベリーKF国際部長の日程**

当研究所創立10周年記念行事の一つであるスウェーデンのKF国際部長ルンドベリー氏夫妻の招聘は下記の日程で行われます。

4月10日（日）来日
4月11日（月）日本生活協同組合連合会訪問
当研究所主催歓迎昼食会（東海大学校友会館）
全国農業協同組合連合会（以下全農と略称）
主催の協同組合に関する講演会（14.00より農協ビル）
全農主催歓迎晩饗会
4月12日（火）日経新聞記者会見　京都観光
4月13日（水）全農主催の京阪地区枚方市星田スーパ店舗の視察
兵庫県生活協同組合連合会主催の灘・神戸生活施設視察と歓迎晩饗会
4月13日（木）兵庫県生活協同組合連合会主催の同氏の講演会(10.00より同連合会)
4月15日（金）社団法人家の光協会主催の懇談会と歓迎晩饗会
4月16日（土）埼玉県勤労者生活協同組合主催の施設視察と歓迎昼食会
4月17日（日）離日

(2) **流通・生協問題視察団の計画**

当研究所創立10周年記念事業の一つとして、8月中旬より約2週間、スウェーデンを中心とする流通・生協問題の視察団の派遣を計画しております。事情は当研究所（電話 212―1447、212―4007）へご照会下さい。

第三種郵便物認可
昭和44年12月23日
スウェーデン社会研究月報　昭和52年3月25日発行第9巻第3号　毎月1回25日発行　編集責任者　高須裕三　発行所　社団法人スウェーデン社会研究所　定価二〇〇円

再版のお知らせ

至誠堂新書58

福祉とは何をすることか

スウェーデンを場として福祉国家の現実を探り、その財政、経済システム、都市対象、教育問題、価値観の変化等、多面的アプローチ

刊の辞　西村　光夫
序　高須　裕三・丸尾　直美

第一章　スウェーデン福祉国家の社会経済史的背景
第二章　選ばれた体制
第三章　スウェーデン式ウエイオブライフ
第四章　福祉社会の担い手たち
第五章　福祉政策と年金
第六章　教育による自由と平等の推進

執筆者（執筆順）
高須裕三
丸尾直美
加藤良雄
永山泰彦
河野道夫
内藤英憲
菊池幸子
小野寺百合子
中嶋博
荒井洌

スウェーデン社会研究所編
350頁定価980円

〒101　東京都千代田区鍛冶町1－3　電話（03）256－8121　振替東京97579　至誠堂

ご　案　内

本年第2回　**5月16日開催予定**

スウェーデン語講習会

当研究所では、スウェーデン語の講習会を、8週間単位で、毎年3～4回宛開催しております。初心者対象で、週2回出席で、午後6時からと7時30分からの各1時間20分の授業です。講師は日本人とスウェーデン人の組合せです。次回は当初以来第35回目となります。

詳細は当研究所へ電話（212－1447、212－4007）へご照会下さい。